「そんな、」
ケルンは掠れた声で云った。
「だから、これでお別れだ。触ってもいいかい？」
「ええ」
クリスティーヌは震える手で、ケルンの黒髪に触れた。それから頬へと。
「知らなかったな。女の子って柔らかいんだな。マシュマロみたいだ」
吃驚して、手を引っ込めたクリスティーヌに、ケルンは尋ねた。
「それでアントワーヌがあなたの乳母なのね」
「その通りだよ。アントワーヌにはあと三年の猶予があるからね」
「それでは、記憶があるの？」
「うん、大体はね」
クリスティーヌは床に腰掛け、まるで屈葬のように、手足を抱え込んだ。
「おやすみ、ケルン。そしてさようなら。もし良かったら、五年後くらいにまたこの村を訪れて欲しい」
「判ったわ」
ケルンはそう云おうとしたが、涙にむせび、声にならなかった。

次の朝、ケルンが目覚めると、クリスティーヌは巨大な卵型の繭に包まれていた。翌日には、繭は固い卵の殻となった。ケルンはその後も待ち続けた。卵が孵化するまで。
その日は、フランソワとアントワーヌもやって来た。卵が割れ、中から銀色の髪に青い眸の赤ん坊が現れた。

五年後、ケルンはクリスティーヌの村に戻った。村の外れでは、子どもたちが遊びに興じていた。その傍らを通り抜けようとした時、ケルンは子どもの一人がスカートを引っ張るのを感じた。
「お姉ちゃん、もしかして、ケルン？」
それは銀の髪に青い眸の男の子だった。
こうして、二十歳のケルンと五歳のクリスティーヌの恋が始まる。

ケルンはそのまま、クリスティーヌの元に留まった。ケルンは時に母親のように、幼いクリスティーヌを慈しんだ。クリスティーヌもまた子供らしい無邪気な表現でそれに応えた。
だが、年の差こそあれ、二人はいつでも恋人同士なのだった。どんな時でも、それは揺らがないのであった。

こうして蜂蜜のような幾年が過ぎた。クリスティーヌは十二歳に、ケルンは二十七歳になっていた。ある日、クリスティーヌはケルンの胸元のペンダントに目を留めた。それは、緑色の鉱石、アベンチュリンに銀色の文字が刻まれた、小振りのものだった。
「ねえ、ケルン。それって文字？」
「ええ、ルーン文字で、愛って意味なの。このペンダントはお護りなの」
ケルンは優しく微笑んで、首を傾げたクリスティーヌを眺めた。
「お護り？」
「ええ、この村に戻るときに、求めたの。クリスティーヌにまた逢えますようにって。そしてそのまま、ずっと一緒にいられますように、って」

試し読み用PDF　©ミカヅキカゲリ

楽日には、劇団の打ち上げがあるからだ。
焼鳥屋のボックス席に陣取ったわたし達は愉しく語り合った。
「しかし、あそこで容子が自決を選ぶとは思わなかったね」
俊ちゃんが云った。容ちゃんの劇団は、さすがに社会派の劇団らしく、沖縄戦をテーマにした芝居だった。クライマックスで、容ちゃん演じるヒロインが、手榴弾により自決するシーンがある。
「えへへ。それより俊一、どう云うことよ。順子ったら、まるで引きこもりぢゃない」
容ちゃんの声が急に鋭く険しくなった。わたしはすかさず反発した。
「引きこもりは酷いわ」
「まあまあ」
俊ちゃんはわたしを宥めてから、改めて容ちゃんの方に向き直る。
「それは俺の咎ぢゃないよ、容子」
「そうよ」
わたしは云った。
「それはアキちゃんの気持ちの問題だよ、容子。俺には何かを強要するなんて出来ない」
俊ちゃんは、いつもの俊ちゃんに似ず、きっぱりした口調で云った。
その口調が幾分冷たいような気がして、わたしの肌はざわりとした。
「それはそうでしょうけど、」
容ちゃんは溜息を吐きながら云う。
「でも、まさか、約束を忘れた訳ぢゃないでしょうね？」
容ちゃんはぶっきらぼうに付け加える。どうでもいい風を装っていたけれど、眸にはかなりの本気がこめ

られている気がする。
「そんな訳ないだろう。そう云う容子はどうなんだよ？」
即答した俊ちゃんに対し、容ちゃんも即答する。
「まさか！」
「ねぇ、約束ってなあに？」
わたしは出来るだけ無邪気に訊いてみた。
俊ちゃんはわたしの方を見て、わたしの眸を覗き込んだ。そうして、わたしの好きな、清潔な笑顔で微笑んだ。この笑顔で微笑まれると、わたしはもう何も云えなくなってしまう。
「アキちゃんは、何も知らなくていいの。俺と容子だけの秘密」
わたしが抗議の声を上げる前に俊ちゃんは、席を立った。
「あっ、俺トイレ」
俊ちゃんが居なくなった所で、わたしはターゲットを変える。
「ねぇ、秘密って、なあに？」
わたしは容ちゃんの方を見遣った。
「知らないわよ。俊一に訊きなさいよ」
容ちゃんは、冷たく云い放った。
「ねぇ、容ちゃん」
「ダメよ、そんな甘えた眸をしても。俊一に訊きなさいよ」
「だって、あの笑顔を向けられると、わたし、弱いんだよね」
「それ以上、云ってみなさいよ。この串を刺してやるからね」

試し読み用PDF　©ミカヅキカゲリ

容ちゃんが怖い顔をしてわたしをねめつけながら、鶉の卵を刺した串を翳す。
「怖ーい！　容ちゃん！」
わたしは無邪気に叫んだが、容ちゃんは一瞬哀しげな顔をした後、そっぽを向いた。
「そんな甘えたって、無駄なのよ」

帰り道、わたしは俊ちゃんにもう一度訊いてみた。
「ねえねえ、先刻の約束って何のこと？」
前を歩いて俊ちゃんはゆっくり振り向く。
「先刻も云ったけど、アキちゃんは何も知らなくていいの。ねっ」
俊ちゃんは穏やかに云う。
「……でも、」
尚も云い募ろうとしたわたしを俊ちゃんが優しく制した。
「いいから」
云って、俊ちゃんは清潔に微笑んで、わたしを見る。
わたしの大好きな清潔な微笑み。
わたしはもはや何も訊けない。

七　月

雨が降っている。お腹が痛い。生理痛。わたしは自分を慰める為、歌を作る。

わたし　まるでお腹に
石を詰められた　オオカミ
重くて　痛くって　苦しくって
もう歩けない

狩りをするのはオオカミの
歌を作るのはわたしの
習性なのに
何でこんな血を見るの

わたし　まるでお腹に
石を詰められた　オオカミ
重くて　痛くって　苦しくって
もう動けない

試し読み用PDF　©ミカヅキカゲリ

２０１４年年賀状小説

おんなじ血。違う躰に脈打って

「また痩せたんやないと？」

詩朗がひなたの浮き出た肋骨を冷たい長い指で辿る。

「ちょうど40キロ」

裸になると、身長１７０㎝のひなたは、長すぎる手足を持て余した子どものように頼りなく見える。

「骨盤が浮いていて、難民みたいやん。ちゃんと食べようと？」

詩朗の指が骨盤に伸びて、ひなたはその冷たさにぞくりとする。

「詩朗ちゃんが来て呉れんからやん」

「僕が来んでも、ちゃんと食べりーよ」

「食べてるもん」

ひなたと詩朗は双子で、同じ貌をしている。だけど、詩朗はひなたを囲っているのだし、ひなたは詩朗に囲われている。

ふたりが肉体関係を持つようになったのがいったい何時からのことなのか、もはやふたりのどちらも思い出せない。気がつくと双子は躰を重ね合うようになっていた。

詩朗は、週に二度ほど、ひなたのマンションを訪れる。それ以外の日は、ひなたは大抵眠るか、川柳ブログの更新をする。

わたしと詩朗ちゃん（弟）は、双子なわけだけど、ちっとも似ていない。詩朗ちゃんは限りなく善良だ。買い物や病院に連れて行って呉れるし、シャンプーやトイレットペーパー（わたしは生まれてこのかた、トイレットペーパーと云うものを自分で買ったことがない）を買って来て呉れる。爪を切って呉れるし、髪を洗って呉れる。

わたしと血が繋がっているとは、とうてい思えない。

おんなじ血。違う躰に脈打って

絡み合う別々の熱ベッド上

曼珠沙華わたくし、嫉妬してゐます

フローライト銀河を映し掌に

試し読み用PDF　©ミカヅキカゲリ

復讐の大祭

茉莉は、十三年ぶりに故郷に帰って来た。復讐の為だ。
今夜、十三年ぶりの大祭が行われるのだ。
茉莉は、キャリーバッグを押しながら、大祭が行われるお社に向かった。

茉莉はお社に入った。そこには一人の少女がいた。
「こんにちは。」
「お姉さん、だあれ？」
俯いていた少女が顔を上げた。少女は眸を見開いた。茉莉がかなり奇妙ないでたちをしていたからだ。服装は普通なのだが、何故か、顔の右半分だけ狐のお面をつけている。

「あなたが今年の巫女？」
茉莉が問うと、少女はコクリと頷いた。
「大祭における巫女の役目をどう聞いてる？」
茉莉の質問に少女は軽く首を傾げながら、答える。
「ええと、十三年に一度、厄を払う為の大祭が行われる。大祭には、その時、十三歳になる巫女が使われる。巫女は村の家々を回り、追い払われる。その後、お社に籠り、神に祈りを捧げる。それから、お社に火が放たれ、巫女は次の大祭が無事に終わるまで、村から追放され、村に戻ることは赦されない。だったかな？」
茉莉は、頷いた。
「やっぱり。わたしは、茉莉。十三年前の巫女よ。」
少女はほっとしたように微笑んで、口を開いた。

試し読み用PDF　©ミカヅキカゲリ

なかったんだ（ごめんね）。だから、余計に嬉しい。

凛子へ

わたしが賛成しないと思ったってどうして？　わたしは何時だって、凛子の味方だよ。ずっとずっと凛子の傍で凛子の成長を見守っていきたいと思ってる。

千秋へ

ああ、違うの、千秋。先生からね、ウィーンの音楽院への留学を勧められているの。

凛子へ

ウィーン？　では、わたし達バラバラになってしまうの？」

この辺から交換日記の調子が変わって来る。

中学の三年の冬のこと、そろそろ将来を考える時期だ。

犯行の約三か月前のことである。

日記は不安定で留学を思い留まらせようとする千秋の記述と、それを窘め理解を求める凛子の冷静な記述とが続く。

だが、ある日、決定的な記述が現れた。

「千秋へ

千秋なら分かって呉れると思うけど、わたしはやっぱりウィーンに留学しようと思う。もう決めたの。

凛子へ

いやよ。応援なんてしないわ。凛子はわたしを棄てて行くんだわ。

千秋へ

そんな大袈裟な。恋人でもないんだから。わたしは歌をやりたいの。わかって頂戴。

凛子へ

いやよ、いやよ、いやよ」

ここから、ノートの最後まで、千秋の気の触れたような、いやよ、が続く。

このノートが大林凛子の手に再び渡ることはなかった。

書類を繰ると、桐生千秋は大林凛子を絞殺し、その喉を切り裂いた。

洋子は千秋に話しかけた。

「わたしは片桐洋子よ。千秋ちゃんね？　綺麗な笛ね」

「貝殻軟骨」

試し読み用PDF　©ミカヅキカゲリ

定型に近づかんとの志向もつ発達障害グループさみし

足萎えの我がふくらはぎリカちゃんのそれめいていて極めてちゃちだ

重いものうしろにのせているときに車椅子って空をも翔べる

前輪の心許なさ愉しくてレバーを倒すに短歌も浮かび

苦しみがぶわりそこからはじまってわれはわれたる核（コア）を手にした

苦しみの中こそ存在理由（レゾン・デートル）があるよう何故か手放せずきた

わたくしが持つ障害がわたくしにさせることとかできぬこととか

かなしみはすきとおるまで眺めましょ　やがてはあまく氷砂糖に

自分ではどうにもならない障害を氷砂糖と名づけて眺む

語彙の持つ　いつかのさみしさ　わたくしと氷砂糖はどこか似ている

試し読み用PDF　©ミカヅキカゲリ

夕暮れにみんな帰った原っぱにいるよう氷砂糖のココロ

「できない」を克服せよ、と云われると氷砂糖がチリリと疼く

みないふりしているけれどしっているわたしはかなりきずついている

障害を氷砂糖と名づけてもやるせなさは減らないけれど

わたくしがわたくしであるやるせなさ　氷砂糖になるのを待って

生白き左手頸(くび)の白き瑕(きず)　そうだね、そんな時代もあった

衣更え　いまのわたしに釦(ボタン)など無駄な服らが多すぎ棄てる

死にたいと思う心はたやすくて絶望ばかり降り積もる明け

来歴を素直に書けば劇的になりすぎるのはわたしの咎(とが)か

「同情をひく真似やめろ」云われたがそんな心算(つもり)は端(はな)っからない

試し読み用PDF　©ミカヅキカゲリ

夏がため帽子贖います太陽は威張っているし厭いですから

顎ライン切り揃えたる黒髪と白い項とちいさなほくろ

際だって少年めいた横貌の眸にかかる長い前髪

このひとを厭い厭いだ大厭い手助けなんか要らない散って

過去日記を読み返せば刻まれたわれあざやかに立ち上がりたり

ソプラノの歌声呉れし友が去り「あの子は死んだ」云い聞かす夜

わたしから喪われてく社会性でもだいじょうぶ　爪は切ってる

いみじくも生殺与奪握られた存在でいる介助者の前

距離感が心地よいひとひとりいてわたしなんだか傾いてゆく

あざやかに死せる夢想をしてみれば憧憬だけが銀河を翔る

試し読み用PDF　©ミカヅキカゲリ

羽のなき扇風機みたくぼくたちは理屈わからずいまを生きおり

生き死にを天秤かける生き方を選んでしまうわたしどうにも

夢は大きく果てしなくわたくしに残るは書くと云うことのみ

もの云わぬ死体ごっこで横たわる　だめだ、わたし、まだまだ生きたい

眸閉じ闇と向き合う瞬間に宇宙とわたしただ此処にあり

殺し合う運命を負ってわたしたち　この出逢いしか赦されぬのか？

殺めなきゃ生き延びられないのでもなおそれでも殺めて欲しくはないの

誰のものでもない大地に境界を描かんとして闘うわれら

おとうとはあなたの軍に殺されてそれでも共に歩めるかしら

終わらない闘いの中ふたりともいのちの方が先に終わるね

試し読み用PDF　©ミカヅキカゲリ

こんなのは悪い夢だとねえ誰か誰かわたしを起こして誰か

澄み渡る未来きたなら草花も兵器に宿る　その日夢見て

来世ではきっと闘いなき場所であなたと出逢う運命願う

考えのクセに気づくと楽になる真珠はボロい殻に隠れて

車椅子、充電切れかけ鈍いけど、途端に世界、彩りゆたか

関わりのうすいひとから夢の中リップクリーム塗ってもらいぬ

風化してわたしが消えても残るのは足枷手械縛めの鉄

「満ち足りる。月を見てればわかる。」って詠うあなたのしずかな体温。

瓦斯灯のもとで逢いましょ銀色の月を分けてもあげるわだから

七音と五音ばかりが気にかかる常に会話は短歌調なり

試し読み用PDF　©ミカヅキカゲリ

そしてなお闇に牽かれるわたくしを不道徳だと他人(ひと)は云うけど

荒んでく（ほほがつめたい）僕からは何をもうまれ出(いで)ないだろう

心臓のかたちの時計、もてあそぶミスター・タイニーみたいな、雨だ。

先輩のクセを受け継ぐ後輩のクセを視るたびゆかしと思う

父からの性的虐待(セクシャルアビュース)夜ごとに出口見えない迷宮みたい

屋上は無防備なかっこでゆくところ　素肌にパジャマ冷たい素足

思春期がひきつづいてるわたくしを友は評して「こじらせてるね」

必要だかたちになった絶望が動けぬことが生きてくために

なずきからお昼に食べたたこ焼きがはみ出しそうな病院帰り

「書くものが太宰っぽいと云われたの」「境涯だって何か似てるよ？」

試し読み用PDF　©ミカヅキカゲリ

ゆかりんてぜんぜん可愛くないけれどこのクオリティ半端ないよね

ダバスコをたくさんかける人生にスパイス以外そんなに要らず

医療用ステンレスだねあなたってストレスフリーなのに冷たい

ゲップ出すために集中せしおりに、躰内(たいない)の音、いみじく多し。

少女だと云えない年になってなお少女たらんと少女標榜(ひょうぼう)

生きるのに絶望しても髪長く洗って呉れる指のやさしさ

背に垂れる長き黒髪 定番といたしてわれの思春期つづく

寝そびれて髪洗われるわれの上オーラのごとく湯気立ち昇る

「この寿命、すこし縮んでかまわない。あいつらみんな滅んでほしい。」

貧しさを「絶讃節約月間」と銘じて耐える　冷凍ごはん

試し読み用PDF　©ミカヅキカゲリ

前庇目深い帽子の所為にして世界をあまり見ないで過ごす

哀しくも寝たり起きたりする象に赦されている無為な一日

夕焼けと柱時計が刻む刻ピンクの象のおくすり手帳

ええいああハンス・カストロフ　深淵を、わたしで善いと誇れる明日を！

〈やさしい〉と〈かなしい〉何処か似通って夕餉の支度　茄子味噌だとか

銀色の澄んだみずうみ水面には紅い三日月零れる涙

革命がわたしに届く　あなたから　文学通し世界を救う

脳内の圧力高く湯に入れば遠い雷鳴みたいな頭痛

冷えている躰をお湯に沈めるとあつくいたくて「無」がおそいくる

学歴が無駄に高すぎると思う夢追人を名乗るにしては

試し読み用PDF　©ミカヅキカゲリ